

2018年9月20日

ユネスコ世界ジオパーク国内再認定および日本ジオパーク新規認定審査結果

日本ジオパーク委員会

日本ジオパーク委員会は、7・8月に現地審査を行った3地域の再認定と2地域の新規認定の可否について審議し、以下のとおり決定した。

再認定：洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク、室戸ユネスコ世界ジオパーク

条件付き再認定：アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク

新規認定：萩ジオパーク

認定見送り：土佐清水

現在、日本ジオパークは44地域である(うちユネスコ世界ジオパークは9地域)。

再認定

洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク

火山との共生というテーマのもと「減災文化」の構築と「火山の恵み」の普及を進めており、国際的な価値を有する地域である。昨年のユネスコによる審査では、ジオパークの運営主体に常勤の地球科学者がいないことなどいくつかの問題点が指摘され、条件付き再認定となった。指摘された課題の改善は進んでおり、来年のユネスコによる審査までに課題解決できると見込まれる。一方、火山活動と関わり深い本地域内にある縄文文化の遺産、及びアイヌ文化、洞爺湖・有珠山形成以前の地質学的事象も本ジオパークの重要な見所であるので、それらに関連させてわかりやすく訪問者に見せることに期待する。

以上のことから日本ジオパークとして再認定する。

室戸ユネスコ世界ジオパーク

ジオパーク活動による経済効果は着実に上がってきており、地域の人々が個々にジオパークを捉え始め、「ワクワクしながら」ジオパーク活動に参加するようになっている。2014年の前回再審査で日本ジオパーク委員会から指摘された課題、及び2015年の世界ジオパーク再審査で指摘された課題については、概ね解決されたと考えられる。室戸において、人口減少は深刻な問題であるが、5つの推進チームに代表される活動の端々に、次世代の人材確保がうたわれており、観光客誘致だけでなく、将来の発展を意識した活動が実施されている。このように室戸では着実にジオパーク活動が定着してきたので、今後はマーケティング戦略等を明記した基本構想の整備に期待したい。

以上のことから日本ジオパークとして再認定する。

条件付き再認定

アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク

高山植物を中心としたアポイ岳の自然を保護する地域住民の持続的な活動や、充実した拠点施設、複数名の専門員の雇用、十分な予算措置など、ジオパーク活動を推進していく上で安定した体制で運営されている。小・中学校一貫で行われるふるさと教育に、ジオパーク学習を活用していく計画もある。しかしながら、持続可能な観光や科学の普及活動に向けた効果的な訪問者のモニタリング等、世界審査の認定時に指摘された事項に対応していない項目がある。また、ユネスコ世界ジオパークに求められる国際貢献に関する活動が弱い。

以上のことから、日本ジオパークとして条件付き再認定とする。

新規認定

萩ジオパーク

3つの時代（白亜紀から古第三紀、新第三紀中新世、第四紀）のマグマ活動によって作られた地形と、そこで育まれた文化や歴史を含む、大地と人の暮らしの結びつきを知ることができる地域である。阿武町および山口市阿東地域が加わったことで、ジオパーク全体のストーリーのつながりが良くなった。また、エリア内各所において見どころおよびストーリーを活用するような様々な活動が活発に行われてきており、ジオパーク活動に興味を示し仲間となるような人たちが着実に増えてきた。ジオパークの可視化や地域全体を通じた活動の充実という課題はあるものの、関係者のジオパークとネットワークに関する理解や活動の質の高さがみてとれ、今後のネットワークへの貢献も期待できる。

以上のことから日本ジオパークとして認定する。

見送り

土佐清水

地殻変動と海底生物の痕跡を残す地層、活発だった火成活動を示す深成岩体、さらにこれらの地質を背景として形成された足摺岬等の地形を始め、変動帯である日本列島の特徴的な地質地形を有する。昨年度の審査で指摘された、自然や文化の遺産の価値付けや地域住民らが積極的に活動できるような場づくりについては、新たな計画に基づき推進されようとしている。

一方で、観光拠点の活用を含め、ジオパークとしてのツーリズムの整備・推進は不十分である。また、事務局と研究者との持続的な連携も欠いている。

以上のことから日本ジオパークとしての認定を見送ることとした。

以上